瀬戸口望コレクションの紹介
～志布志市坂之上遺跡～

黒　川　忠　広

はじめに

瀬戸口望氏は，鹿児島県を代表する考古学者の１人である。島戸貞良氏との出会いをきっかけに古代への興味を持ち，家業の傍ら，丹念に情報を集め，遺跡を訪れては遺物を採集する日々を送っていた。その瀬戸口氏の地道な活動が一躍全国的に注目されるきっかけが，東黒土田遺跡の成果である（瀬戸口 1981）。

黎明館には，この東黒土田遺跡出土品の他に，瀬戸口氏が長年にわたり収集した資料を「瀬戸口望コレクション」として，御遺族から平成 13（2001）年に御寄贈いただき，収蔵している。これらは，長年にわたる瀬戸口氏の考古学研究の蓄積であり，当館では，資料の紹介ならびにその活用について，常設への展示や企画展の開催[(1)]等を実施するとともに，機会を捉えて再洗浄や注記等の基礎作業を行ってきた。

このような中，整理作業が進んだものから順次資料紹介を進めて行くこととし，平成 29 年度は，坂之上遺跡について図化作業を実施した。

１　瀬戸口望コレクションの概要

（１）瀬戸口望氏について

瀬戸口氏は，大正 12（1923）年志布志町志布志に生まれる。昭和 42（1967）年に鹿児島県考古学会会員となり，以降，数多くの論文を発表した。平成 12（2000）年に 76 歳で死去するまで，遺跡調査ならびに報告書執筆も数多く手がけている[(2)]。

特筆すべき論考としては，鹿児島考古第 21 号に掲載された「連穴土壙のもつ機能的性格について」であろう（瀬戸口 1987）。当時は，連穴土坑[(3)]そのものの類例が少ない状況の中で，瀬戸口氏は遺構や遺物との関係を丹念に検討し，「「燻製の製造用土壙」，あるいは単に，「乾燥肉の製造用土壙」」であるとし，さらに，付属施設の有無についても倉園Ｂ遺跡の状況から周辺のピット群に注目し，「連穴土壙には被覆が不可欠であり，地上設備の設置は当然」とした上で，「住居家屋なみに小柱使用の地上設備を設け，風雨等の被害を防いだ土壙の重要性」を指摘した（瀬戸口 1987）。この論考は，後に霧島市上野原遺跡の発見により，連穴土坑の機能論について一躍注目を集めることとなる。

（２）資料の概要

瀬戸口望コレクションは，平成 13（2001）年８月 28 日に瀬戸口氏の御遺族から黎明館が寄贈を

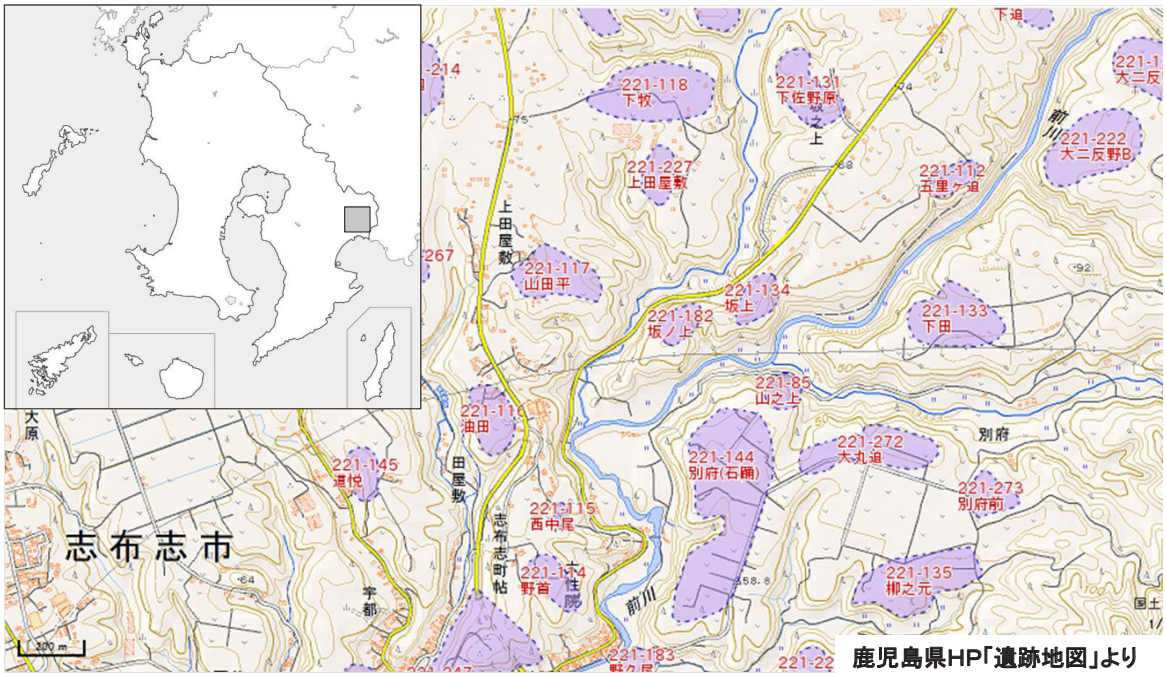
受けた，志布志市を中心とする 60 遺跡以上の資料等の総称である。資料数については，受け入れ段階で概ね１万点を超えており，瀬戸口氏の精力的な活動をその数量が裏付ける。なお，これらの中には，遺跡名称等が判然としないものもあるため，今回提示する遺跡一覧表は現時点の暫定的なものとして理解していただきたい（表１）。加えて遺跡地図そのものは，時点修正を重ねられるものであり，瀬戸口氏の認識時点と現在とでは異なる場合もあり，遺跡名称等の変更もある。これらの点については，遺跡所在の市町教育委員会との連携が必要不可欠な作業であり，今後，これらの課題については継続して対応することとし，各遺跡の報告において順次紹介することとしたい。

２　坂之上遺跡資料の紹介

（１）遺跡の概要

坂之上遺跡の概要は，『志布志の埋蔵文化財』の中に詳細が収録されており（瀬戸口 1985），これを引用したい。「佐野原台地が南に延びる最先端に位置する遺跡である。横峯に湧出する小川が本流前川にＹ字状に合流する三角形状台地の上縁に坂之上集落が点在している」として，瀬戸口氏が既に発表していた河川と縄文遺跡との関係性についての視点が（瀬戸口 1974），継続的に考察されていることがこの記述からもわかる。

遺跡範囲等については，各種の開発によって「遺跡の主体部はすでに消失し，残存部があるとすれば縁辺にそった先端の一部（僅かな盛り土が見られる）だけと考えられる。しかし境界となる東側の側面には若干の石片の混入が見られることから，あるいは，この部分に一部包含層が延びている可能性がある。なお，東側のこの部分の表層には，縄文時代晩期に該当する土器片や黒燿石等の散布があったことから別



鹿児島県HP「遺跡地図」より

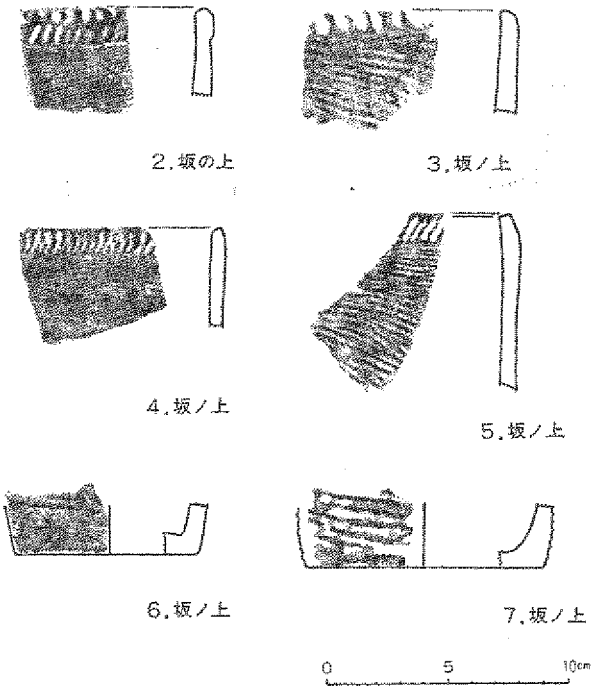
第１図　坂之上遺跡の位置

番号	現在の遺跡名	寄贈時点の登録遺跡名	所在地	備　考
1	百堂穴	百堂穴	志布志市志布志町安楽字岩戸	
2	水神松	水神松	志布志市志布志町安楽字水神松ほか	
3	鳥井下	鳥居下	志布志市志布志町安楽字鳥井下	
4	中原（曲瀬）	中原	志布志市志布志町安楽字中原	
5	小瀬Ａ	小瀬 Ａ	志布志市志布志町安楽字中原小瀬	
6	二重堀Ａ	平城	志布志市志布志町安楽字二重堀	
7	宮脇	宮脇	志布志市志布志町安楽字宮脇ほか	
8	山角Ａ	上ノ門Ａ（山角）	志布志市志布志町安楽字山角	
9	山角Ｂ	上ノ門Ｂ	志布志市志布志町安楽字山角	
10	炭床，上重	上ノ門Ｃ，Ｄ	志布志市志布志町安楽字炭床，字上重	
11	井手平	井手平	志布志市志布志町内之倉字井手平	
12	今別府Ａ	今別府	志布志市志布志町内之倉字今別府ほか	
13	姥ヶ谷	姥ヶ谷	志布志市志布志町内之倉字姥ヶ谷	
14	十文字	十文字	志布志市志布志町内之倉字十文字原	
15	立花迫Ａ	立花迫	志布志市志布志町内之倉字立花迫	
16	樽野	樽野	志布志市志布志町内之倉字樽野	
17	樽ノ口	樽野口	志布志市志布志町内之倉字樽野	
18	風穴	大川内	志布志市志布志町内之倉字風穴ほか	
19	宮前	宮前	志布志市志布志町内之倉字竹下	
20	東黒土田Ｃ	射場地野	志布志市志布志町内之倉字東黒土田	
21	上出水	上出水	志布志市志布志町内之倉字東原	鹿児島考古第16号
22	山裾Ａ	森山　山裾	志布志市志布志町内之倉字山裾	
23	道重	森山　道重	志布志市志布志町内之倉字弓場ケ迫	
24	倉園Ｂ	倉園Ｂ	志布志市志布志町内之倉字池野	
25	倉園Ａ	倉園	志布志市志布志町内之倉字大原	鹿児島考古第10号
26	倉園Ａ	倉園 Ａ	志布志市志布志町内之倉字大原	
27	橋ノ口	橋之口	志布志市志布志町内之倉字橋ノ口	鹿児島考古第６号
28	東黒土田	東黒土田	志布志市志布志町内之倉字東黒土田	鹿児島考古第14,15号
29	向園	片野　浜場	志布志市志布志町内之倉字向園	
30	白木原Ａ	田之浦，板山	志布志市志布志町田ノ浦字板山	
31	白木八重	白木八重	志布志市志布志町田ノ浦字白木八重	鹿児島考古第８号
32	宮地原	田之浦　大越	志布志市志布志町田ノ浦字宮地原ほか	
33	倉野	倉野	志布志市志布志町田ノ浦字吉原	
34	坂上	坂之上Ｂ地点	志布志市志布志町帖字坂上	
35	坂之上	坂之上	志布志市志布志町帖字坂ノ上	
36	二反野	二反野	志布志市志布志町帖字二反野	
37	鎌石橋	鎌石橋	志布志市志布志町帖字前畑	
38	下原	外之牧前段	志布志市志布志町帖字南水ヶ迫ほか	
39	家野	天堤家ノ原	志布志市志布志町帖字家野ほか	
40	柳井谷	柳井谷	志布志市志布志町帖字柳井谷	
41	深迫	深迫	志布志市志布志町夏井字中野	
42	夏井ケ浜	夏井海岸	志布志市志布志町夏井字前田	
43	夏井ケ浜	夏井ヶ浜	志布志市志布志町夏井字前田	鹿児島考古第７号
44	飯盛山古墳	飯盛山古墳	志布志市志布志町夏井字牟田	
45	上園	夏井上園	志布志市志布志町夏井字上園ほか	
46	宮ノ後	宮後	曽於市末吉町南之郷字宮ノ後	鹿児島考古第８号
47	太田井	大田井	宮崎県串間市北方字太田井	鹿児島考古第６号

表１　瀬戸口望コレクション所収の主な遺跡一覧

に，八反田遺跡として取り扱ったが，地形的に元来は同一遺跡であった可能性もあり，以前からの表層が残る八反田遺跡は，縄文時代晩期と同早期の復合した遺跡ということができる」と隣接する遺跡との関係を考察した（瀬戸口 1985）。

坂之上遺跡が遺跡地図に掲載されるのは，昭和 49（1974）年の瀬戸口氏の論文中で紹介された遺跡一覧表から確認できる（瀬戸口 1974）。行政が開発行為に対して行う記録保存調査の報告として刊行される発掘調査報告書では，昭和 53（1979）年の別府（石踊）遺跡の報告書（志布志町 1979）から既に紹介されており，1970 年代には，その存在が認識されていたと言えよう。現在，坂之上遺跡は 221-182 番として記載されている。



第２図　弥栄氏報告資料

この坂之上遺跡の資料が図化されるのは，今回が初めてではなく，一部が弥栄久志氏によって紹介（第２図）されている（弥栄 1977）。この時では，６点が図化されている[(4)]。

なお，隣接する八反田遺跡は，当初は坂ノ上Ｂ遺跡あるいはＢ地点とされ，瀬戸口望コレクションにも同様の遺跡名で収蔵されているが，現在の遺跡地図では坂上遺跡（遺跡番号 221-134）となっている。

（２）資料報告

①土器類

土器類は，140 点が確認された。時代別に分類すると，縄文時代早期 117 点，縄文時代後･晩期２点，弥生時代１点，時期不明 20 点となる。次に縄文時代早期は，口縁部 14 点，胴部片 95 点，底部８点となり，口縁部はその特徴から大きく２類に細分でき，器形と文様の特徴から，南九州貝殻文系土器の岩本式土器から前平式土器に該当する。胴部については，辻タイプに類似するものがあり，これを３類とした。

１類としたものは（第３図１～５），口唇部上端に深いキザミを施すことで，小波状を呈する特徴を有し，口縁部上端には縦位に近い斜位の刺突文を施す。胴部は貝殻条痕文が全面に施されるという特徴がある。口縁部 14 点中５点が該当し，全てを図化した。

種別	時代・時期	器形・器種等	部位	分類	資料点数	小計
土器類	縄文時代早期前葉	深鉢形	口縁部	１類	5	140
		深鉢形	口縁部	２類	9	
		深鉢形	胴部	１・２類	93	
		深鉢形	底部	１・２類	6	
	縄文時代早期中葉	深鉢形	胴部	３類	2	
		深鉢形	底部	３類	2	
	縄文時代後・晩期	浅鉢形	胴部	-	1	
		深鉢形	底部	-	1	
	弥生時代中期後半～後期初頭	甕	胴部	-	1	
	不明	不明	不明	-	20	
石器類	不明	磨製石斧調整剥片	-	-	1	8
		二次加工剥片	-	-	2	
		使用痕剥片	-	-	1	
		剥片	-	-	1	
		礫	-	-	3	
資料総点数						148

表２　坂之上遺跡資料一覧表

１は，弥栄氏報告２に該当する。内面に段を有する。文様は，口唇部上端のキザミの下に斜位の貝殻刺突文を施し，横位の貝殻条痕文により口縁部刺突文様帯より薄く仕上げる。内面は，口縁部に丁寧なナデにより凹み，胴部は斜位のナデが施されている。

２は，内面に段を有し，口縁部上端を部分的にナデにより尖らせる。そこへキザミを施すが明瞭な小波状は呈さない。文様は，口唇部のキザミを貝殻刺突文で施し，その下に縦位の貝殻刺突文を施し，胴部は横位の貝殻条痕文を施す。内面は，条痕文の後にナデが施されている。

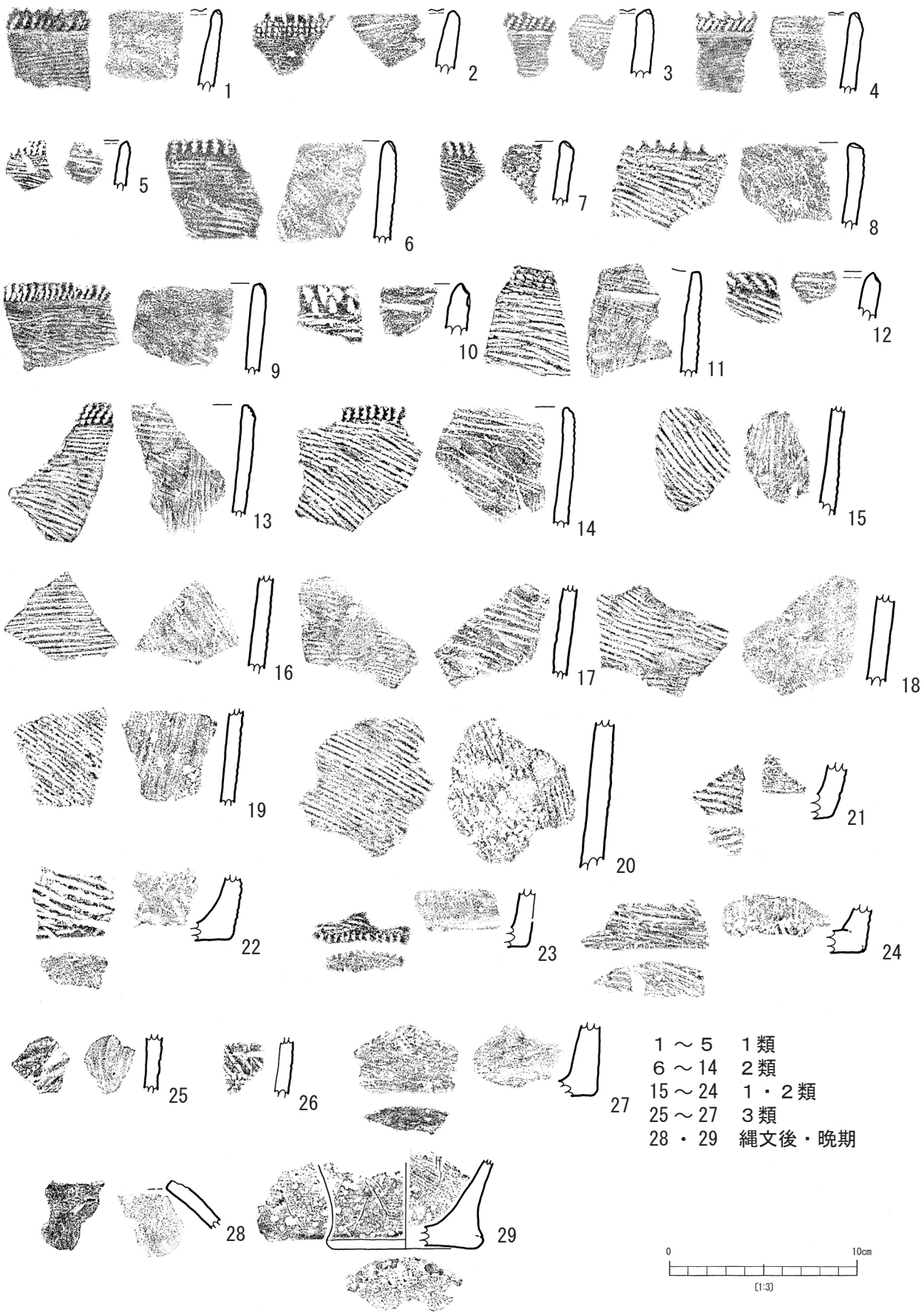
３は，内面に段を有し，口唇部上端のキザミは風化で不明瞭。口縁部上端にはやや斜位の貝殻刺突文が施され，胴部は横位の貝殻条痕文が施されている。内面には，幅約３㎜程度の貝殻条痕文が施文されている。

４は，内面にやや弱い段を有し，口唇部上端のキザミはやや深く，施文の角度はやや斜位に入る。文様は，口縁部に斜位のキザミを施し，胴部は横位の貝殻条痕文の後に丁寧にナデが施される。この胴部のナデは，口縁部文様に対しては行われていないことから，胴部の貝殻条痕文を強く意識したナデであると理解できよう。内面にはナデが施されているが,外面ほどの丁寧さは感じられない。

５は，内面に段を有し，口唇部上端というよりは口縁部上端と言うべきであろうか，貝殻刺突文が深く施文される。胴部は，横位ないし斜位の貝殻条痕文が施され，内面は，貝殻条痕文の後にナデが施されている。

２類としたものは（第３図６～14），口唇部にキザミを有するが，小波状ではなく平坦になる傾向が認められるという特徴がある。口縁部片 14 点中９点が該当し，全てを図化した。

６は，口縁部上端に縦位の貝殻刺突文を施し，胴部は横位ないし斜位の貝殻条痕文を施す。この



第３図　坂之上遺跡資料実測図

貝殻条痕文の幅は約２㎜程度である。内面は，口縁部で横位のナデが施され，胴部は，斜位の貝殻条痕文の後に丁寧なナデが施される。

７は,口唇部内面にわずかに段を有する可能性がある。口縁部上端に貝殻刺突文が縦位に施され，胴部は横位ないし斜位の貝殻条痕文が施される。内面は，やや荒い斜位のナデが施されている。

８は,弥栄氏報告３に該当する。口縁部上端にヘラ状工具によるキザミがほぼ真上から施される。この施文の前，丁寧なナデが施されている。その下位から斜位の貝殻条痕文が施される。内面は，丁寧なナデの後にケズリが見られる。ケズリの工具幅は１㎝あり，場所によっては深くケズリが行われ，器壁の厚さが一定しない。

９は，弥栄氏報告４に該当する。口唇部をやや内側で平坦面を形成することで，内面の段を意識している可能性がある。口縁部は貝殻刺突文を羽状に施文する。上段と下段とは切り合い関係にあり，上段を施文した後に下段を施文している。胴部は，はじめ丁寧なナデを施した後に横位の貝殻条痕文を施文する。内面は，貝殻条痕文の後に丁寧なナデを施し，ナデは一部で光沢を生じている。

10 は，やや厚手の土器である。口縁部にキザミを２段施す。同一施文具を上段と下段とで工具の向きを変えており，下段の施文は上段の施文の間を意識している。内面は貝殻条痕文の後にナデが施される。胎土に小礫が多く含まれている。

11 は，口唇端部にキザミが施され，口縁部には縦位の押引状施文が見られる。胴部は，やや深めの貝殻条痕文が施され，器壁の厚さは一定しない。口縁部が僅かに波状を呈するため，角筒形の発生段階の資料である可能性も想定される。内面は下から上への斜位の強いケズリが施され，その後に口縁部にケズリが施される。

12 は，内面に段を有すると思われるが，はっきりとしないやや厚手の土器である。文様は，口縁部上端に貝殻刺突文を施し，胴部は斜位の貝殻条痕文が施される。内面には条痕文が見られる。

13 は，弥栄氏報告５に該当する。口縁部上端に斜位の貝殻刺突文を深く施し，胴部には貝殻条痕文が施されている。内面は，口縁部では横位，胴部では縦位ないし斜位に貝殻条痕文が施された後にナデが施される。胎土にはカクセン石が含まれている。

14 は，口縁部が僅かに内傾する器形である。文様は，口縁部上端に縦位の貝殻刺突文施し，胴部は斜位の貝殻条痕を下から上へと施文する。

次ぎに，１・２類の胴部・底部片について紹介していく。１・２類の胴部片は 93 点が確認され６点を，底部片は６点が確認され４点を図化した。

15 は，外面に斜位の貝殻条痕文が施され，内面には下から上へのケズリが確認される。

16 は，横位に近い斜位の貝殻条痕文で，内面は斜め方向のケズリの後にナデが施される。

17 は，斜位の貝殻条痕文の後にナデが施され，このナデにより部分的に貝殻条痕文が消失している。内面の貝殻条痕文は太くて深いため,その後のナデ調整後も深い部分の条痕が残されている。

18 ～ 20 は,外面に斜位の貝殻条痕文が施される。19 の内面は下から上へのケズリ痕が認められ，そのケズリの後にナデが施される。20 の内面は剥落が著しい。

21 は，底面にも貝殻条痕文が見られる。しかしながら，今回底部として扱ったが，内面の器面調整の方向などから，角筒形の角部胴部片の可能性も考えられる。

22は，弥栄氏報告７に該当する。外面に，太く深い貝殻条痕文を斜位に施す。

23は，底部外端に貝殻刺突文によるキザミが施されている。内面は，横方向の丁寧なナデが施される。

24は，弥栄氏報告６に該当する。横位の貝殻条痕文後にナデが施され，底部外端には浅いキザミが施される。内面には縦位の工具痕が観察され，器面調整が下から上へと行われていることがわかる。粘土の接合痕も残されており，この観察により，胴部の作出は，円盤状に仕上げた底面の外縁上位に胴部を接合させていることがわかる。

３類としたものは（第３図25～27），胴部に刺突文が不規則に施文されるものである。底部については検討の余地が残る。４点が確認され，この内の３点を図化した。

25は，外面に丁寧なナデによる器面調整後，横位に近い貝殻刺突文と凹線に近い太めの沈線文とを施文する。内面は条痕後にナデが施されている。外面の文様から，辻タイプの一種と思われる。

26は，横位と斜位の貝殻刺突文を組み合わせる。内面は剥落が激しい。胎土に雲母を含む。

27は，器面内外共に横方向のナデが施され，文様は観察できない底部片である。胎土に雲母を含むことなどから，これらと同一型式の可能性を想定した。

縄文時代後・晩期の土器（第３図28・29）として，浅鉢の胴部屈曲部片と底部の２点を確認し，これを図化した。

28は，浅鉢胴部とするにはやや厚手で判断に迷った資料である。

29は，底部径7.6㎝を計り，張り出す特徴がある。底部を作出した際に複数回粘土を貼り付けたのであろうか，接合痕と思われるものが複数確認される。

その他の資料としては，小片で図化には至らなかったが，弥生時代中期後半から後期初頭に位置する山ノ口式土器の甕の胴部突帯周辺の破片が１点確認された。

②石器類

図化には至らなかったが，８点ある。内訳は，磨製石斧調整剥片１，二次加工剥片２，使用痕剥片１，剥片１，砂岩製の扁平礫１，その他の礫２点である。なお，『志布志の埋蔵文化財』に記載されている，石鏃，石錘については今回の作業では確認できなかった。

（３）小結

坂之上遺跡は，表採資料から見ると縄文時代早期前葉を主体とし，僅かに縄文時代早期中葉と縄文時代後・晩期，弥生時代中期から後期初頭の遺跡であることがわかった。縄文時代後・晩期の資料については，既に瀬戸口氏が隣接する遺跡との連続性を指摘しており，紹介された段階では判然としなかったのであろうが，今回の整理においてこれを裏付ける可能性が高まったと言えよう。

今回，改めて遺跡の主体となる時代であることが確認された縄文時代早期前葉においては，岩本式土器から前平式土器の段階にほぼ限定され，これらは南九州貝殻文系土器でも最古の部類に属する。志布志市周辺には，この時期の遺跡が多く，また，近年の東九州自動車道建設に伴う発掘調査においても良好な遺跡が多数調査されている。これらも踏まえ，当該期の南九州東南部の様相を詳

細に検討する必要があろう。さらに，東黒土田遺跡のような縄文時代草創期に遡る遺跡との連続性など，温暖化に伴う人類の生活環境の変化に伴う適応化について，中小領域での変化を捉えて行く必要がある。

おわりに

瀬戸口氏の資料は，遺跡数だけでも 60 遺跡を超える。これらは，現在の遺跡地図作成時における時代決定などの参考となった基準資料を含んでいる。その中でも，倉園Ａ遺跡資料は，指宿式土器と市来式土器との関係を考える上で欠くことの出来ない資料であり，未報告資料とあわせて再報告も必要と考えている。加えて，これまで弥生時代の遺跡として理解されていた二重堀Ａ遺跡[5]についても，当該期の良好な資料が含まれていることが朧気ながらわかってきている。

瀬戸口氏の思いも含めて，これらの資料を丹念に整理し，御寄贈いただいた御厚意に答えられるよう，今後とも精進して取り組んでいきたい。

註

⑴ 黎明館企画展「瀬戸口望コレクション」として平成 13 年 11 月 7 日から平成 14 年 1 月 27 日まで開催した。

⑵ 例えば，鹿屋市打馬平原遺跡は，縄文時代早期の多種多様な遺物が出土し，その重要性から鹿児島考古誌上でも紹介された。

⑶ 瀬戸口氏は壙の字を用いているが，小稿では，上野原遺跡などで使用されている坑の字を用いた。

⑷ 弥栄氏によれば，当時瀬戸口氏の自宅を訪ね，拓本と実測の作業を行ったとのことであった。

⑸ 瀬戸口氏が紹介した時点での遺跡名称は，表１に示したとおり平城遺跡である。

引用・参考文献

瀬戸口望「志布志の縄文遺跡の分布 (立地・標高・その他について)」(『鹿児島考古』第９号，1974 年）鹿児島県考古学会

瀬戸口望「東黒土田遺跡発掘調査報告」（『鹿児島考古』第 15 号，1981 年）鹿児島県考古学会

瀬戸口望「連穴土壙のもつ機能的性格について」（『鹿児島考古』第 21 号，1987 年）鹿児島県考古学会

弥栄久志「鹿児島県の円筒土器」（『考古学論叢』４，1977 年）別府大学考古学研究会

志布志町教育委員会（『別府（石踊）遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書，1979 年）

志布志町教育委員会（『志布志の埋蔵文化財』，1985 年）

（くろかわ　ただひろ　本館主査）

番号	部位	文様・器面調整		色調		胎土								備考
		外面	内面	外面	内面	石英	長石	輝石	カクセン石	雲母	砂粒	小礫	その他	
1	口縁部	貝条痕	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○	○			○			
2	口縁部	貝条痕	貝条痕後ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○	○			○			
3	口縁部	貝条痕	貝条痕	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○				○			
4	口縁部	貝条痕	貝条痕後ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○	○			○			
5	口縁部	貝条痕	貝条痕後ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○				○			
6	口縁部	貝条痕	貝条痕後ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○				○			
7	口縁部	貝条痕	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○					○			
8	口縁部	貝条痕	ナデ後ケズリ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○				○			
9	口縁部	貝条痕	貝条痕後ナデ	暗赤茶褐色	灰茶褐色	○	○				○			
10	口縁部	貝条痕	貝条痕後ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○				○	○		
11	口縁部	貝条痕	ケズリ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○				○			
12	口縁部	貝条痕	貝条痕	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○				○			
13	口縁部	貝条痕	貝条痕後ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○		○		○			
14	口縁部	貝条痕	ナデ後貝条痕	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○				○			
15	胴部	貝条痕	ケズリ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○				○			
16	胴部	貝条痕	ケズリ後ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○	○			○			
17	胴部	貝条痕	貝条痕後ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○							
18	胴部	貝条痕	ナデ	明黄茶褐色	明黄茶褐色	○	○				○			
19	胴部	貝条痕	ケズリ後ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○							
20	胴部	貝条痕	貝条痕後ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○				○	○		
21	底部	貝条痕	ケズリ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○				○			
22	底部	貝条痕	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○	○			○			
23	底部	貝条痕	ナデ	明黄茶褐色	黄茶褐色	○	○							
24	底部	貝条痕	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○							
25	胴部	貝刺突	貝条痕後ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○				○			
26	胴部	貝刺突	-	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○			○	○			
27	底部	ナデ	ナデ	赤茶褐色	暗茶褐色	○	○			○	○			
28	胴部	ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○			○				
29	底部	貝条痕後ナデ	貝条痕後ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○				○	○		

表 3　遺物観察表